

イマヌスフ 米国出身の元カトリック信者 (3 / 4)

:

明:ムスリムへの が、真の宗教への扉を きます。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: イマヌスフ

日 13 Jul 2015

集日 13 Jul 2015



母はホリデ シ ズンの に忙しくなり、表向きは平 々な日々が流れました。ただ、私は宗教 への探求のことを1分たりとも忘れませんでした。

感 祭の は、例年通りクリスマスパ ティがあちこちで かれ、ある日大学の学生が集うパ ティが地元のレストランで かれたため、女友 から われました。そこには大 が来ており、私の にはピッツバ グ大学で博士 程に在籍しているナイジェリア出身の学生が座って いました。

私は彼が着ていた 的ナイジェリア衣装に魅了されました。彼はユダヤ教徒が被るヤム ルカ帽が大きくなったようなものを被っていました。彼は温和な表情と明るい笑 をし ており、私たちは学校のことを し始めました。

食事を注文する になると、彼はメニュー について手助けしてほしいと nderきました。彼は「豚肉を食べられないし、アルコールも めない」と言ったので、私は喜んで手 いました。食事を注文し えると、なぜ豚肉とアルコールがダメなのか ねてみました。彼は笑 で「宗教的理由だから」と答えました。

「どの宗教なの？」と ねると、彼は「私はムスリムなのです」と答えました。

私の宗教探知センサ が非常警 を らしました。その いたことのない宗教について、もっとより多くのことを知りたいと思いました。すでにほとんどの宗教について べ尽くしていた私は、 くべきことを心得ていました。

「もし差し支えなければ、あなたの宗教の主要な信条を教えてくださいませんか？

そしてあなたの宗教を一言で言い表すとすれば、何ですか？」彼は全く 踏することなく、笑 を せてこう言いました。「私たちは神が唯一であると信じます。神は三位一体の一部ではなく、子女も けず、かれには同位者もありません。神は唯一なる者です。」

それは、とても 明快な答えでした。私はそれに全く はありませんでした。それはとても理にかなっていることだと えると、彼はまた笑 を せました。次に私は彼の宗教が女性にしてどのような 解を持っているのか、また女性の地位はどう なされるのか ねてみました。

ほんの かなガイドラインしか提供しない宗教と社会に属することによって、女性として苦しんでいた私は、その答えを固唾を nder待ちました。私は何か 足させてくれるような解答をととても欲していました。

彼は直ちに答えました。「イスラ ムにおいて、男女は平等です。双方の地位は同じであり、同じ を有しています。また双方ともに同じ と を受けます。ただし、平等であることは同一であることを意味しているのではありません。男女はお互いに相 点をもって 造されています。双方は平等ですが、相 があるのです。」

双方の相 がいかにして 著になるのか知りたいと思いました。彼は言いました。「たとえば 婚において、ムスリム女性は夫による完全な扶 などの多くの 利 それらは男性 よりも多いかもしれませんが、彼女は夫に であることが求められます。」

「夫に であること ？」

それはどういう意味ですか？」彼は笑い始めました。彼は 去に何度も同じ をされていることは明らかでした。「つまり 」彼は忍耐 く 明しました。「 婚 あるいは家族のための 断が求められているとき、夫は妻に相 し彼女の意 を尊重しなければならないものの、最 的な 断は彼に委ねられているということです。

「このように考えてみてください。 婚 は海に浮かぶ船のようなものだ。船の 命を握る船 は一人でなければなりません。船に船 が二人いると、その船は沈んでしまいます。」

彼はゆったりと椅子に座り、私の反 を待ちました。私は彼の言ったことに反 できませんでした。それは理にかなっていませんでした。私は常々、夫は家族のための最 断をしなければならないと心の奥底で感じていました。私はイスラ ムにどんだんのめり んでいきました。

彼が教えてくれたことはすべて筋が通っていました。高 感と安 を感じると同 に、私はなぜイスラ ムを今まで知らなかったのだろうと不思議 に思いました。スプハ ナッラ 、ア ッラ はすべてを相 しいタイミングでもたらすのでしょうか。

「もっとこの宗教について知りたい」と彼に えると、彼はモスクでムスリムたちと知り合えば、そこ に答えてくれたり、クルア ンの翻 本がもらえたりするとのことでした。 番号を教えると、 してくれることを彼は 束しました。私は 喜し、そのときが待ちきれませんでした。それは1982年、12月3日の金曜日でした。

次の月曜日の朝、私は地元の の入り口で の前から待っていました。当 、イスラ ムに する本の数は充 していませんでしたし、 かれていた情 もあまり正 ではありませんでしたが、そのことにまだ 付いていなかった私は、片っ端からそれらを みりまし

た。

最初に手にした本をくと、序には「イスラムとは神の御心に依するという意味である」とありました。素晴らしいと思いました。それについて何一つ知る前から、私はその依という言葉を使っていたのです。

安を得るのであれば、神の道への完全なる依が求められなければならないことに私は付いていました。その瞬、私は真理を見つけ出したと悟りました。私は本をむさぼりみつつ、例のナイジェリア人男性アフマドがしてくれるのを心待ちにしました。彼は束通りしてくれたのです。

彼はモスクと任者の番号を教えてくださいました。のあまり震えながらも私はそこにし、かが受器を取ってくれることを祈りました。口に出た人物は、非常に外国りのいし方で、私のねた人は留守だと言いました。

私はそれにもひるまず、イスラムにく味を持っており、より多くのことを学びたいということを明しました。彼は直ちに迎の意思を示し、モスクの住所を教えてください、すぐにでもそこをしてくルアンの翻本を受け取るよう招待してくれました。

私は言にならないほどしました。私は同日の午に束を入れ、はずんだ心で娘と一にそこへ行くをしました。

あの日のことを思い出すと笑ってしまいます。私はえ良くありたかったため、パンツスツを履き、の毛をカルし、化して香水を付け、1の娘にも一番可らしい服を着せました。

それが新たな人生の第一であることは分かっていました。私と娘は二人三脚なのです。そこに到着し、建物に入って最初に出会った人物はニカブを着けたムスリム女性でした。彼女はエキゾチックな外をした美しい女性でした。私は彼女にアブドルハミドという人物に会いに来た旨をえました。

彼女は丁寧に 段まで私を 連れて行き、 くべきことに完璧な英 語でこう言いました。「彼は この 段の上のオフィスにいます。」当 然、まだ私はイスラ ムが「 国の」宗教などではないことや、世界中で最も急成 をしている宗教であることを知りませんでした。その は まだ多くのことを知らなかったのです。ただ、私が正しい道にあることだけは 信じて いました。

オフィスに入ると、そこにいた全 体の 人が私の方向を向いたかと思うと、すべての目が伏 し目になりました。一人として私の目を直 視する人はいませんでした。皆が笑 った のです。それらは暖かく、幸せそうで真 実な笑 でした。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2422>

著作 2006-2015 断 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 断 を禁じます。